

な鮎雑炊をご馳走になった。

サイレンに長崎の猫は立ちどまり空を見上げる十一
時二分 金子哲也

一九四五年八月九日午前十一時二分、チャールズ・ス
ウィーニー少佐を機長とする米軍機「ボックスカー」は、
長崎上空から人類史上二発目の原子爆弾を投下した。一
首の猫は、七十六年後の十一時二分の長崎の猫である。

信号とネオンの色が滲みていた雨の仮免路上練習

西村すみこ

それぞれの自身の仮免路上練習をなんとなく思い出さ
せる一首と思う。はじめて一般道路を走るときの緊張感。
どこをどう走ったかあまり覚えていないような、終わっ
て緊張感から解放された直後の印象だけを、ストリート
に短歌にした、そんな感じがうまく出ている。若い頃の
私は、一生運転免許はとらないで、ひたすら酒を飲もう
と決めていた。だから四十代半ばまで免許をとらなかつ
た。そんなことまで、この一首で思い出させられた。

四十の机の上を拭いてゆくそれぞれの位置確かめな
がら 田中拓也

高校の教員は毎日、担任クラスの教室の四十もある机
を一つ一つ拭くのか、とびっくりした。コロナのおかげ
で、病院、飲食店等々さまざまな職場で感染予防の各種
の作業を強いられているのは知っていたが、忙しい代名
詞のような教員までもか、との感慨をおぼえる。決して
なぜやりではなく、一つ一つ丁寧に拭いているらしい感
じが読める。

明日咲く花卉を五重にずらしつつ日日草の蕾ふくら
む 蓬田真弓

小さな「日日草」の蕾に目を近づけるかたちで、てい
ねいにうたつて成功。まったく色に言及せず形態だけを
表現して、すつきりしたかたちになったと思う。

雨の止む僅かな時間に鳴く蝉を真似て急いで買ひ物
に出る 増田満美子

今月号のこの作者の歌四首に雨がでて来る。雨が多
かった今年の夏を思い出す。この一首「真似て」がユー
モラスで楽しい。

草刈機通りてゆきし地面よりかはらず響くこぼろぎ
の声 松橋雅実

草刈機が通りすぎる前もコオロギの声は聞こえてい
たのだ。「かはらず」に強く意味をあずけて、小さな
「えっ！」をクローズアップしてみせた手腕。

胃カメラに侵略される鼻の穴、人間という管のはじ
まり 菅野彰一

胃カメラを鼻からさし込まれた場面。下句、肉体的神
経的な次元ではなく、理性を前面に出した表現で特色を
出している。

ことばなき絵なれどことばあふれつつ戦没画学生慰
霊美術館 本田一弘

長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館・無言館で
ある。若くして太平洋戦争で没した人たちの絵が展示さ
れている。絵なのに言葉があふれているという、正面か
らの批評が印象的。